村越化石さんと俳句

なぜ、「魂の俳人」とよばれたのか？

化石さんの病気「ハンセン病」は、なおすことがとても難しい病気でした。体の見た目の様子から、まわりの人に伝染すると思われ、家族へのめいわくも考えて、遠くに出て行きました。16歳のときでした。

まわりの人びとの目からかくれるように治療をしていたころ、俳句を知ります。戦争も始まり、いつ死んでもおかしくない世の中で、りっぱな俳句の先生たちとの出会いがあり、化石さんの俳句はじょうずになっていきます。戦後には病気によくきく薬が出て、命は助かりましたが、その後もつらい障害が出ました。目も悪くなり、48歳で、ついに両方の目が見えなくなってしまいました。

そのような中でも、「心の俳句をつくる」という、先生の教えを胸にきざんでいた化石さんは、そんな自分のすべてを、そのまま受け入れるようになっていました。病気になったつらさや悲しみ、苦しみを乗りこえ、命の大切さや力強さを俳句によむ化石さんは、いつしか「**魂の俳人**」と呼ばれるようになり、たくさんの賞をもらっています。「化石」という名前は、自分の体はすでに土にうもれ、石となった「もの」だと考えて、自分でつけたそうです。

「・・・・私にとって俳句は救いであった。自然をうたい、自分の存在を作品に残せたことは喜びであった。これからも自然とともに生きる俳句をつくりたい。自然を守り、日本語を守るためにも、俳句の火を消してはならないと思う。」

これは、80歳を迎えた年の、化石さんのことばです。

左に、村越化石さんの俳句をいくつか紹介します。

生き堪えて　七夕の文字　太く書く（昭和26年）

施設の俳句なかまで　七夕まつりをした。男の子・女の子それぞれの施設に住む　子どもたちにも来てもらい、いっしょにかざった。生きているからこそ、できることだと思った。

生きねばや　鳥とて雪を　払ひ立つ（昭和46年）

寒い雪の中でも、鳥でさえ　雪を払って立ち上がる。私も、目が見えないという、苦しみやつらさを乗りこえて　生きていこう。

望郷の　目覚む　八十八夜かな（平成7年）

今日は八十八夜。故郷では、みんなが茶つみにいそがしいときだろう。目には見えなくとも、お茶の香りで、子どものころのなつかしいけしきが、思いだされる。

村越化石さんについてはこちら↓

「玉露の里」にある、化石さんの句碑

第22回 “魂の俳人（たましいはいじん）” 藤枝市村越化石俳句（むらこしかせき）大会 〈小学生の部〉 募集要項

村越化石さんは、大正11年に藤枝市岡部町で生まれました。難しい病気にかかり、家族から遠くはなれた場所に住み、治療を受けました。つらい生活の中で有名な先生に俳句を教えてもらい、すばらしい俳句を作るようになりました。戦後、新しい薬が出て、病気はなおりましたが、48歳のときに両目が見えなくなりました。化石さんは、目が見えなくても前むきですばらしい句をつくり、「**魂（たましい）の俳人**」と呼ばれるようになりました。平成26年3月、91歳でなくなるまで俳句をつくりつづけました。

ぜひみなさんに村越化石さんを知ってもらい、俳句を作る楽しさを学んでほしいと思います。気軽なきもちで俳句をつくり、応募をしてください。お待ちしています。

★応募のきまり：1人1句です。**左側の応募用紙**を使用してください。
先生の指示に従い応募してください。
必ず、一つの句の中に季語（きご・きせつをあらわすことば）を入れてつくってください。

★選　　者：高柳　克弘（たかやなぎ　かつひろ）俳句結社「鷹（たか）」編集長、読売新聞朝刊「KODOMO俳句」選者、中日新聞「中日俳壇」選者、早稲田大学講師

★　　賞：村越化石賞（1名）市長賞（1名）教育長賞（1名）文化協会会長賞（1～2名）
入選（計10名程度）

★応　募　締　切：**令和8年9月4日（金）※学校への提出期限は学校の指示にしたがってください。**

★主　　催：藤　枝　市

★応募先・問合せ先　〒426－8722　藤枝市岡出山1丁目11番1号
藤枝市役所　街道・文化課
（電話番号　054　－　643　－　3036）

★表　彰　式：**令和8年11月29日（日）予定**　※入賞者には事前に連絡します

＊応募用紙記載の個人情報は他に流用いたしません。

きりとり線

3～6年生用

第22回 “魂の俳人” 藤枝市村越化石俳句大会 〈小学生の部〉 応募用紙

★学校名・学年を忘れずに。また、作品と氏名には、ふりがなをおねがいします。

作品（ふりがな）	
学校名　小学校	年
	氏　名（ふりがな）